にちぎん

2016 NO.46 夏

特別寄稿

黒田東彦 日本銀行総裁

私の出会った文豪

インタビュー　扉を開く

林 修 東進ハイスクール・東進衛星予備校 現代文講師

競争社会の現実を直視して生きぬけ！

地域の底力

真庭市 岡山県

地域の宝物を見いだし未来へと歩む岡山県真庭市

対談　守・破・創

溝口善兵衛 島根県知事

布野幸利 日本銀行政策委員会審議委員

子育てしやすい先進県へ――島根の戦略に学ぶ日本再生

エッセイ　“おかね”を語る

火野正平 俳優　着懐せず

着懐せず

火野正平

絵・江口修平

どひゃ～、日本銀行（以下、日銀さん、日銀）が、火野正平にお金について書けってさ。

どういう風の吹きまわし？　まぁ書けっちゃ書くけど。

オレにとってお金というものは、はるか上空成層圏の上あたり、風に吹かれて右から左、西から東へと飛びかっているものであり、全く実態が掴（つか）めないものである。結構稼いでいるのに。

たまにオレの懐に飛びこもうと元気なお金がオレを目指して降りてくるが、大気圏突入時に燃え尽きてなかなか着懐（注）しないのである。若い頃からずっとこんな調子。

そもそもお仕事をしてお給金を頂いて、その中から物を買ったり遊びに行ったり、これが健全な状態だよね。

しかし火野正平はこのニュートンの法則を全く無視し、稼ぐ前に使うのである。

なぜそうなったかは今となってはもう原因は探れないが、昔よく仕事をしていたある撮影所の経理に乗り込み、どうせ近い将来なにか仕事があるだろうと赤い伝票に金額とサインを書き、まぁ俗に言う「前借り」をするのである。

撮影所の経理も変に納得してすんなりお金を出してくれる。

しばらくして一本のドラマを撮影することになる。その中のある役を「AにしようかBがいいか、そうだ火野正平からは回収すべきものがある。だから火野にこの役をさせよう」。そうやって前借りを解消する。所属する事務所に対してもしかり。

このことを俺は先物取引と呼んでいる。

これは仕事を続けていく上でかなり有効な手段である。

たいして技量もない俳優が半世紀もの間仕事を続けてこられたというのも、こんなことをしていたからじゃないでしょうかね。てへ。

オレは若い頃から草野球チームの一員だった。団体競技なんて大キライだったけど、団体で飲むのは大スキなゆえ。

そのチームに日銀さんの銀行マンがいる。結構優秀な男で、色々な職業の猛者たちの集まりをうまく束ねて数年間チームの監督をやったりしていた男。ある日この男と真剣に話をした。

「チームで日銀に突入するから中からうまく手引きしろ」

男は言った。「まかせろ。裏門開けて待っている」

オレはあの裁断されていないつづりの一万円札、あれをいっぱい持って買い物に行きたかったんだ。前から。

いつか野球チームのユニホームを着た一団が日銀を襲った、というニュースが出たらオレ達だと思ってもらいたい。てへ。

（注）火野氏の造語。懐に留まるの意。

＊編集から火野氏へ

お札は国立印刷局で印刷しており、日本銀行に持ち込まれる際には、既にお札の形をしているので、裁断されていないお札はございません。あしからず、ご了承ください。

ひのしょうへい●1949年東京都生まれ。子役として「少年探偵団」（フジテレビ）他に出演。代表作にＮＨＫ大河ドラマ「国盗り物語」、映画「俺の血は他人の血」。最新出演作に、ドラマ「警視庁南平班～七人の刑事～」（TBS）、「池波正太郎時代劇スペシャル顔」（J:COM ×時代劇専門チャンネル）。「にっぽん縦断こころ旅」（NHKBS プレミアム）では旅人として自転車に乗って全国を走っている。

にちぎん

SUMMER 2016　NO.46

CONTENTS

2 エッセイ／“おかね”を語る
着懐せず　俳優 火野正平

4 特別寄稿
私の出会った文豪　日本銀行総裁 黒田東彦

8 インタビュー／扉を開く
林 修　東進ハイスクール・東進衛星予備校 現代文講師
競争社会の現実を直視して生きぬけ！

13 地域の底力―― 岡山県真庭市
地域の宝物を見いだし未来へと歩む岡山県真庭市

20 対談／守・破・創
溝口善兵衛　島根県知事
布野幸利　日本銀行政策委員会審議委員
子育てしやすい先進県へ―島根の戦略に学ぶ日本再生

24 貨幣の世界――❷　［形 その2］
古代から近世の東アジア　前編

26 日本銀行のレポートから
「経済・物価情勢の展望」（展望レポート）―2016年4月―
「金融システムレポート」―2016年4月―

32 トピックス
平成28年熊本地震後の日本銀行の対応ほか

35 AIR MAIL from NewYork
ニューヨークの金融街を散策

表紙のことば

日本銀行は、明治二十六年（一八九三）四月、根室出張所所属として釧路派出所を開設しましたが、明治三十一年（一八九八）十二月、釧路派出所は根室出張所とともに廃止となりました。戦後、道東地区の経済開発が重要視されたことから、昭和二十五年（一九五〇）五月、釧路支店の設置が決定しました。その後、昭和二十七年（一九五二）十月、日本銀行の第三二番目の支店として、釧路支店が開設されました。

表紙の二階建ての現店舗は、二代目となります。初代店舗は老朽化が進み、また、事務量の増加から手狭となったため、平成二十五年（二〇一三）五月、釧路シビックコア地区という都市整備区画内に新築移転しました。目の前には、誰もが利用できる市民に開かれた広場として「中央オープンスペース」があります。日本銀行釧路支店もこの広場と同様、皆様に親しんでいただけることを願っています。

表紙・画 北村公司

私の出会った文豪

日本銀行総裁　黒田東彦（はるひこ）

もし、文豪に出会えたら、皆さんはどうしますか？　緊張で何も言えませんか？　思い切って感想をぶつけてみますか？　文学論を戦わしてみますか？　あるいは、「生身の作者なんか作品と関係ない」と天気の話でもしてみますか？　あるいは、あるいは……。

いつもの堅い日本銀行の業務のお話に替えて、今回は、ほぼ半世紀前の文豪との出会いについて黒田総裁の思い出話を皆さんに紹介しましょう。はたして大の読書家である黒田総裁と文豪との出会いはどのようなものだったのでしょうか。

作家や文芸評論家といった人たちとは全く縁のない社会生活を送ってきたが、不思議なことに、若いころ何人かの文豪に出会ったことがある。ほとんどが半世紀ほど前のことなので、詳細は覚えていないが、ごく一部を鮮明に記憶している。そのような思い出を記してみたい。

（敬称略）

■■■

最初に出会った文豪は、江戸川乱歩（一八九四～一九六五年）である。あれは、私が高校生のときなので、一九六二、三年ころだと思うが、東大の駒場祭に行って乱歩の講演を聞いたのである。私は、家に隣接した東京教育大学附属駒場高校（現筑波大学附属駒場高校）に通っていたので、歩いて一五分ほどの東大教養学部のある駒場キャンパスには何度か行ったことがあった。駒場祭のプログラムに乱歩が来て講演するというのを見つけ、推理小説ファンの私は、さっそく出かけたのである。

江戸川乱歩（提供：立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター）

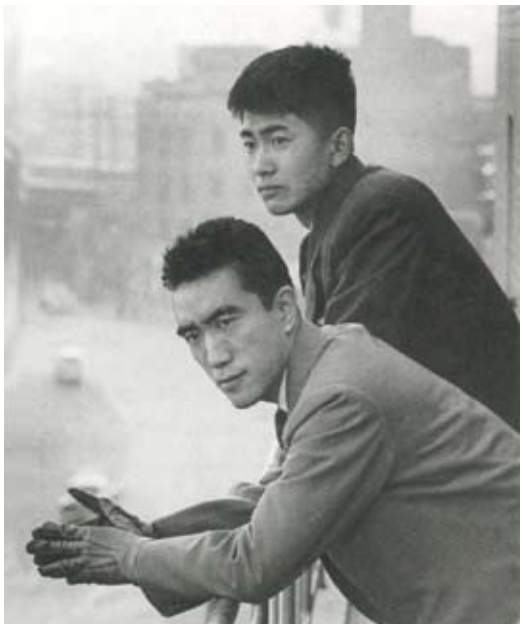
どの教室だったか憶えていないが、五、六十人は入れるくらいの部屋で、行ってみると、まだ数人し

か人が集まっていなかった。そこで待っていると、何と、主催者による特別の紹介もなく、あのベレー帽をかぶった乱歩が出てきて、いきなり講演を始めたのである。確か、変身願望に関する話だったように思うが、ぼそぼそと、しかし、印象深い実話だかフィクションだかわからないエピソードを小一時間話してくれたように記憶している。

もちろん、それまでに、乱歩の子供向けの「少年探偵団」シリーズのみならず、初期の「二銭銅貨」「心理試験」「D坂の殺人事件」から、「押絵と旅する男」や「目羅博士」なども読んでおり、乱歩は好きな作家の一人だった。ただ、どういう人物かは知らなかったので、目の前の老人が日本における推理小説のパイオニアとは、なかなか信じられなかった。

■■■

次に出会った文豪は、石原慎太郎（一九三二年～）である。一九六七年四月に大蔵省（現財務省）に入省してすぐに、新入省者に対する研修が葉山で行われたのだが、その教養講話の講師としてやってきたのである。私は、芥川賞を授与された「太陽の季節」しか読んだことがなかったが、どのような話をしてくれるのか、興味津々であった。そこに、サンダルを履いてラフな格好の石原慎太郎が現れたのである。



石原慎太郎と三島由紀夫（提供：文藝春秋）

しかし、石原慎太郎は当時すでに政治に関心が向かい、「若い日本の会」の活動を経て政界へ進出しようとしていたときであり、もっぱら政治的なことを話してくれたように記憶している。そもそも、初めに同期の研修生がそれぞれの仕事を簡単に紹介した際にも、それを途中で遮って、日本の政治状況を憂える持論を滔々（とうとう）と述べたのだった。したがって、残念ながら、文学的な話は聞けなかったのである。

■■■

私は、大蔵省入省時に大臣官房秘書課に配属され、人事や研修関係の手伝いをしていたので、翌年の一九六八年の新入省者に対する研修では、教養講話の講師として小林秀雄（一九〇二～一九八三年）を呼ぶことになり、秘書課の上司とともに鎌倉の家を訪ねた。鎌倉

山の頂上付近にあった小林邸は、瀟洒（しょうしゃ）な日本家屋で、玄関から入ったところに広い応接間のような洋間があり、そこで講師を依頼したのである。

小林秀雄の文章は当時の大学入試によく出題されていたので、いくつかの評論は読んだことがあったが、難解で怖い人のように思っていたところ、大変ざっくばらんな人で、快く講師を引き受けてくれたことを憶えている。今になって、もっといろいろなことを聞いておけばよかったのではないかと思う次第である。

■■■

若いころ最後に出会った文豪は、三島由紀夫（一九二五～一九七〇年）である。やはり秘書課にいた一九六七、八年ころだと思うが、ある大蔵省の先輩が新宿のアングラ劇場に連れて行ってくれたときのことである。当時、アングラ劇場で前衛的な劇を上演することが流行っており、そこでは、三島由紀夫の劇が上演されていた。一幕の短い劇だったが、終了したところで、会場の一番前にスポットライトが当たり、花束を抱えた三島由紀夫が舞台に上がって主演者にそれを渡すのを見たのである。

三島由紀夫（提供：藤田三男編集事務所）

小林秀雄（提供：文藝春秋）

私は、「仮面の告白」や「金閣寺」から、「鏡子の家」や「英霊の聲」まで、三島由紀夫の著作をほとんど読んでいたが、三島本人を見たのは、そのときが初めてだった。一六〇センチそこそこの身長のようだったが、ボクシングやボディービルで鍛えた筋肉質の体躯に短く刈った髪が印象的だった。しかし、その印象は著作から受けるものとは全く異なっているように思われた。

一九六九年から一九七一年までの二年間、私はオックスフォード大学に留学したが、一九七〇年十一月のある日、カレッジの大学院生寮で大きなどよめきが起こり、南アフリカからの留学生が「三島由紀夫がハラキリをした」と泣き叫んでいた。この白人の留学生は、映画は大島渚、小説は三島由紀夫の大ファンだったのである。私も呆然として声もなかったことを憶えている。帰国した後、「春の雪」に始まる「豊饒の海」シリーズを読み、深く感銘を受けた次第である。

■■■

その後は、文豪には全く縁がなかったが、一九八四年から八六年まで三重県に出向し、その際に親しくなった人から紹介されて、吉村昭（一九二七～二〇〇六年）に何度か会ったことがある。吉村昭の短編やエッセイはたくさん読んでいたが、「戦艦武蔵」や「破獄」など評判の高い長編は読んでいなかったので、あまり著作のことは聞かなかった。一度などは、大勢の人たちとともに吉村昭と夫人の作家津村節子（一九二八年～）を囲んで食事をしたこともあるが、やはり、著作のことは聞かず、ごく世俗的なことしか話さなかったように思う。著作から、謹厳な人のように思っていたが、きわめて人あたりの良い、優しい人であった。

■■■

一九九三年から九四年まで大阪国税局長として関西に赴任していた折、ある会合で司馬遼太郎（一九二三～一九九六年）を見かけたことがある。にこやかな表情と見事な白髪の司馬遼太郎の周りには人だかりがしていて、私は近づけなかった。私は、「竜馬がゆく」『坂の上の雲』「翔ぶが如く」のようなベストセラーにはあまり関心がなく、「ペルシャの幻術師」「果心居士の幻術」「空海の風景」などを愛読していたので、こうした著書について尋ねたかったのであるが、果たせなかった。これは、今でも残念に感じている。

津村節子と吉村昭（提供：津村節子、撮影：齋藤康一）

司馬遼太郎（提供：司馬遼太郎記念館）

■■■

このように文豪との出会いを振り返ってみても、私は、よくよく文学的な交流には縁遠いようである。純文学では、森鷗外、夏目漱石、芥川龍之介、谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫などが好きであり、推理小説では、岡本綺堂、江戸川乱歩、横溝正史、戸板康二、泡坂妻夫、連城三紀彦、島田荘司、北村薫、京極夏彦、宮部みゆき、東野圭吾などが好みで、ずいぶん読んだものだが、著作を読むことと作家に会うこととは全く違うことなのだろう。私にとっては、著作を読んで感銘を受けることが最も大切であるが、作家に会って作品に対するイメージに変化が生まれることも、また楽しみである。

INTERVIEW

人を聞く

東進ハイスクール・東進衛星予備校 現代文講師

林 修

Osamu Hayashi

大学受験予備校の講師として授業を行いながら、その合間にテレビ出演なども精力的に行っている林修さん。新卒で就職した銀行をわずか五カ月で退社、借金返済のために予備校に勤め始めた……という異色の経歴の持ち主だ。失敗も経験して培った物事の捉え方から、今の教育や若者をどう見るか。競争社会である現実を直視させない公教育に対する苦言から、厳しい世の中を生き抜くために必要な「考える力」を身につけることまで、幅広く語っていただいた。

取材・文 小堂敏郎
写真 野瀬勝一

競争社会の現実を直視して生きぬけ！

可能性を一つずつ消しながら予備校講師となる

――林先生は平成元年（一九八九年）に東大法学部を卒業後、最初は日本長期信用銀行（略称「長銀」。現在の新生銀行）に就職されていますね。

林　僕はシンクタンクが第一志望だったんです。長銀を選んだ理由は、当時、経済学者の竹内宏さんがいらっしゃった長銀総合研究所に行きたかったからです。

就職活動では政府系金融機関や都市銀行も回りました。日銀さんにはあっさり一発で落とされましたけれど……。僕は授業よりも雀荘に入り浸るような、不真面目な学生でしたから、当然ですよね。それでも、他のシンクタンクと長銀から内定をいただいて、迷った結果、長銀に行ったんです。

――ご著書やテレビ番組での発言で、私が印象に残っているのは、林先生がこれだけ時の人となっても「自分の職分はあくまで予備校講師」「こんなブームがいつまでも続くわけがない」と、冷静に見ていらっしゃることです。ご自身に関する客観的な視点を、どんなきっかけや経験から身につけたのでしょうか。

林　客観的に自分を見ているとか、特に意識したことはないです。でも、バブルの時代に大学生から社会で働き始めたころを過ごした経験は、人生の土台を築くに当たって、決定的に大きい影響があった気がします。自分は何でもできるとか、人生はどうにでもなる、といった甘い考えが骨の髄まで染み込んで、そんな状態で長銀に就職したんですね。ところが、長銀に入るとすぐ、雰囲気に違和感を覚えました。「これはおかしい」と。

――銀行で何がおかしいと感じられたのでしょうか。

林　やはり皆がバブルで熱くなっていて、無限に経済が膨張していくような想定で融資を行っていたところです。「日経平均五万円は堅い」という話すらされていて……。それはどう考えてもおかしい。過去の歴史を見ても、経済は必ず循環し、好況と不況を繰り返すものです。僕は法学部出身でしたが、経済を真剣に勉強していたので、いろいろ理論的に考えたときに、日経平均五万円なんていうシナリオは成り立たない。好景気（バブル）の山に到達したときの谷は、一体どれくらい深いのか。それを考えたら、いつかクラッシュするぞと。「ここはとりあえず離れよう」と思って、銀行を辞めたんです。

――その後、どうされたのですか。

林　経営コンサルタントや輸入会社など、友達が起業してやっている仕事を手伝ったり、投資顧問会社を知り合いと一緒につくってみたりもしました。

――そのような起業家の方々との仕事を林先生はどう感じられたのでしょうか。

林　実は、あまりおもしろくなかったんです。起業や会社経営

に向いているのは、仲間と一緒に熱くビジョンを語ったり、他の人を巻き込んだりするのが、すごく楽しいというようなタイプだと思います。ですが、僕はそうではない。

大学を適当に過ごして社会に出てから、自分は何ができないかということがようやく分かってきたんです。日本全体がバブルに浮かれたように、自分は何でもできると思っていたけれど、才能の無さを思い知った。自分の可能性が一つずつ消えていき、人生はどうにでもなるという錯覚から脱していきました。

――その後、予備校講師の仕事をどのようなきっかけで始められたのでしょうか。

林　もともと学生時代からアルバイトで講師の仕事をしていました。アルバイトの中心は家庭教師でしたが、友達の代行で予備校や塾で教えると、「来週からは君が来てくれないか」とそこの責任者から、必ず言われたんです。

そこで、起業した会社の雲行きが怪しくなり、借金も背負ったときに、昔うまくいった仕事でお金を返そうと思い、予備校でアルバイトの講師を始めました。これがまた、どこでもうまくいったんですよ。やはり、人には向き不向きがあるということでしょうね。僕は、努力して、教える仕事がうまくなったとは思わないですから。

――予備校講師は林先生にとって天職だったと。

林　そう思ったことはないんです。自分の可能性が消えていくなかで、唯一残った、適性を感じる仕事をしているだけです。人間というのは、できることが本当に少ないんだなと思います。自分のできることを選ぶのか、やりたいことにこだわるのか。僕の場合はやりたいことを優先しません。やるべきこと、俗な言い方をすれば、自分が「勝ちやすい」ことを選ぶ。そんな感覚を得たのは、いろいろ失敗もして、可能性が消えていく経験をしたおかげだと思います。

はやし・おさむ● 1965 年、愛知県生まれ。私立東海中・高を経て、東京大学法学部卒業。日本長期信用銀行（現新生銀行）に入行後、5 カ月で危機感を抱いて退社。その後、27 歳で東進ハイスクール・東進衛星予備校の現代文講師になる。現在、東大・京大コースなどの難関コースを中心に授業を行い、抜群の合格実績を誇る同予備校の躍進に貢献。また、同予備校のテレビ CM で放送された「いつやるか？今でしょ！」のセリフで、2013 年のユーキャン新語・流行語大賞を受賞。テレビ番組の司会や講演など、予備校講師の枠を超えた活躍を続けている。著書に『受験必要論 ―― 人生の基礎は受験で作り得る』（集英社）、『林修の仕事原論 ―― 壁を破る 37 の方法』（青春出版社）、『林修の「今読みたい」日本文学講座』（宝島社）などがある。

自分の頭で考える力を付ける

――そんな林先生はどんな授業をされているのでしょうか。自分の昔の経験では、予備校というと、問題を解くテクニックを伝授する場というイメージがあります。

林　僕はそういうテクニックを伝授して終わりといった授業を一切しません。こうやったら問題が解けるよという手順を示しはします。しかし、その解き方を「はーい」となぞるのは勉強ではありません。昔、講師をしていた数学を例にとれば、公式を覚え、出題にうまくあてはめるテクニックを学ぶことが勉強ではなく、公式の導出過程をしっかり学び、なぜそれが公式であるかを考え、理解するということが勉強です。それは、抽象的な概念を整理・創出する能力を育てるということです。

そうした勉強を生徒に促すため、授業でいつも強調することは「僕の言うことなんか素直に聞く必要はない」ということです。生徒は僕の話を絶えず批判的に捉えて、納得する部分があれば受け入れて使ったらいいんです。そんな姿勢で自分の頭を使い、自分流の勉強法を見つけることが大事だと教えています。

――大学を卒業して、即戦力として仕事ができる人は少ないと言われます。自分の頭を使えない、考える力を身につけていないからだと思います。

林　おっしゃるとおりです。僕の授業の目的は、生徒に「考えるヒント」を与えること。そこから生徒が自分だけのやり方を探していってほしいと思っています。

日本の学校教育について

――日本の学校教育については、どう見ていらっしゃいますか。

林　僕のような門外漢が言うのは失礼でしょうが、今は「思いやりを持って、みんな一緒に」といった「非競争のすゝめ」が重視されています。「思いやりを持つ」こと自体は何も間違ってはいません。しかし、なぜ思いやりを持たなければいけないかといったら、現実の社会は、本質的に競争社会であり、優勝劣敗は避けがたいが、それだけでは社会は維持されないということが挙げられます。そのことを看過して「みんな一緒」という平等性のみが強調されます。現実社会をきちんと示し、そのうえで、勝者が敗者を思いやる大切さを教えるべきだと思います。

ただ、これからも公教育の現場はそう大きく変わらないと思います。なぜならば、先生自身に、競争体験が不足しているように思うからです。アメリカのように、先生以外の職業経験のある現実社会を知っている先生を増やしていく必要があります。

「自己中心的編集能力」を捨てて現実を直視せよ

――現在の社会について現代文を教えられている林先生は、生徒にどのような話をされているのですか。

林　社会の変化は恐ろしいほど速く、競争はもっと過酷になっていくと思います。例えば、一〇～二〇年後には日本人の仕事の多くが人工知能（ＡＩ）に代替されて、無くなるだろうという研究もあります。僕は若い人に「ほどほどで生きるのが、ものすごく難しい世の中になるよ」と伝えているんです。

どういう能力を持っていたら、将来なくならない仕事に就けるか。その研究では、抽象的な概念を整理・創出する能力や、他者と交渉・折衝する能力が要求される仕事はなくならないとされています。この研究が正しいとするならば、どちらかの能力で勝負できるようになって、生活できるようになろうという話をしています。

――若い人の反応はどうですか。

林　深刻に受け止めています。この仕事も、あの仕事も消える、これからの時代は、貧困層と一部の大金持ちの二極化が進んでいきかねないと話すと、静まり返りますね。

現実社会はシビアな競争社会だという危機感を若い人たちに持ってもらわないとなりません。ちなみに僕が東進ハイスクールに採用された二十数年前、現代文の講師は一〇〇人程度いましたが、今は五人しか残っていません。リストラ率九五パーセントというシビアな世界を、僕は常に危機感を抱いてくぐってきました。

そんなシビアな世界かつお先真っ暗な産業であることを理解せずに、「予備校講師になりたい」と志望する若い人がいます。

――少子化の進行で、業界全体が構造不況に直面していますね。

林　日本の一八歳人口は二〇一八

年までに一〇万人減ります。大学進学率が五割程度ですので、大学受験人口は五万人減ることになります。一学年一〇〇〇人の大学が五〇校も不要になる。さらに今後、推薦入試も増えるでしょう。予備校講師の志望者に「将来、予備校は不要になるかもしれないけれども、この業界に本当に入りたいの？」と聞いたことがあります。そうしたら「そんなに大変なんですか」と。自分に都合の悪いことは見ていないんです。

僕はこれを「自己中心的編集能力」と命名しています。自分に都合の良い世界・情報だけを編集し、勝手に何とかなると思い込む。先を見据えて動くことができない。そんな人が案外多いんですよ。

――世の中の動きを自分の将来に引きつけて考える力も、これから必要になりますね。

林　若い人は「ここで働きたい」と思ったら、その業界の過去一〇年を徹底的に調べてみるべきです。これまでどういう変化をたどってきたかを調べ、これから先はどうなっていくかを考えてみる。物事を過去から現在へ、現在から未来への流れで捉えることが大事です。

歴史的に捉えてみて、働きたい業界に明るい未来が見えないかもしれません。どうするか。そこで「やりたいこと」にこだわらず、周囲と比べて自分がうまくできる、勝てる場所を探すことも必要です。社会が変わっていくときには、新しい仕事も生まれます。「これは勝てる」という場所を見つけてしまえば、そこから人生が大きく開けると思います。

「金融」を知らないと競争社会で不利になる

――林先生にとってのお金の意義、お金との向き合い方を教えてください。ご著書では「お金は使い方が難しい」と書いていらっしゃいます。もっとも、今の林先生は忙し過ぎてお金を使う暇がないと思いますが、いかがでしょうか。

林　それが実情ですけれども、昔から物欲がなく、物欲もないからお金はそんなになくていいと若い頃は思っていました。

ただし僕はバブルの時代を経験したから、そう思えたんです。バブルの時代は何となく、それなりに稼げた時代でしたから。しかし、前に述べたように先々多くの仕事が無くなっていくので、そこそこの生活を維持するお金を稼ぐことすら難しい時代になると思います。僕は、お金が無いなら無いで何とかなるという人生を送ってきました。しかし、お金の無さにも限度がありますよ。

お金とは、何かの目的のために使う「手段」です。しかし、お金がないと、つまらないことで争いになる。お金だけで幸せにはなれないけれど、お金で防げる不幸はありますよね。

――金融教育の必要性については、どう考えていらっしゃいますか。お金儲けの方法ではなく、社会を生き抜く一つの武器として、お金に関する知恵が必要であると理解されたら、教育現場も、若者たちも「金融教育」にさらに真剣になると思いますがいかがでしょうか。

林　金融教育は絶対必要です。高校生の段階で、海外のようにお金をめぐる実践的な教育を始めていいと思います。先に述べたような「みんな一緒」ではなく、現実は競争を避けることが不可能であり、そうした競争の中を生きていく必須の知識、という切迫感が生徒の側にあれば、金融教育は広まり、かつ効果的に行われると思います。

――本日は、貴重なお話をどうもありがとうございました。

聞き手／情報サービス局長（取材当時）・高橋経一

地域の底力

地域の宝物を見いだし 未来へと歩む岡山県真庭市

山々に囲まれた真庭市に、
新たな風を吹かせたのは、
昔から受け継がれてきた資源と、
気概あふれる人々の心だった。

取材・文 山内史子
写真 野瀬勝一

廃棄物だった木くずを燃料として活用する真庭バイオマス発電所をはじめ、多彩なのれんが町を彩る城下町・勝山の景色、緑豊かな高原で健やかに育まれるジャージー牛など、多種多様な地域の資源を生かしつつ真庭市はまちの活性化を目指す。

安定した暮らしのために地域の資源を生かす

東西約三〇キロ、南北約五〇キロ。岡山県内最大の行政地域を誇る真庭市は、二〇〇五年に県北部の九町村が合併して誕生した、人口約五万人の自治体だ。

中国山地のほぼ中央に位置し、小高い山が連なる合間に町や集落が点在。一見、交通の便があまり良くないようにも思える。しかしながら中国自動車道が東西に、岡山自動車道と米子自動車道が結節して南北に走り、岡山市や倉敷市なら一時間弱、大阪までは約二時間で移動できる。

北部の蒜山（ひるぜん）は酪農、その南に広がる湯原（ゆばら）は温泉、南部は農業など、地域により主力産業は異なるが、要（かなめ）の一つは林業。真庭市の八割は森林が占め、江戸時代には木材とたたら製鉄で栄えた歴史がある。

そして現在、国内外の関心を集めるのは、その森林資源を新たに生かした取り組みだ。「里山資本主義」（地域の里山の恵みを活用し、経済再生やコミュニティーの復活を果たす）を柱にまちづくりを進める真庭市の状況を、市長の太田昇氏に伺った。

「活性化のために、企業誘致しようにも、ここにさほど大規模な工場ができるわけではない。それよりも地元の資源を見いだし、磨きをかけることが大事ではないか、資源をきちんと生かすことが、地域の豊かさをつくっていくのではないかと思います」

真庭市の場合、その地域資源の一つが木材だ。各地で減少、あるいは消滅している製材所が現在でもまだおよそ三〇あり、植林、育林、伐採、製品化のサプライチェーンが守られてきた。全国平均で四〇％の山の境界画定が、九四％進んでいる状況も、資源の有効活用を後押しする。

「この数字が意味するのは、森林が管理されている、山の木を大事にしてきたということなんです。業界的には厳しいものの、植林をふくめ、真庭の林業はしっかりとまわっています」

特産品の「美作檜（みまさかひのき）」がふんだんに使われた市庁舎が、なんとはなしにやさしい温もりに包まれているように思えてその理由を尋ねると、太田氏が笑顔になった。

「冷暖房はチップとペレットをボイラーでたき、電気は木質バイオマス発電所から引いています。若干の太陽光を含めて一〇〇％自然再生エネルギーを利用しているのは、全国の役所でもここだけだと思います」

市役所の一角、ボイラー室はガ

南部、落合地区の春を彩る「醍醐の桜」は、樹齢700年とも1000年ともいわれ、文字通り後醍醐天皇も目にしたとの伝説が残る。県の天然記念物指定。

北部の湯原温泉は宇喜多秀家の母おふくが療養に訪れたなど、戦国時代から湯治場として知られてきた。川底の砂を吹き上げて湯が湧く、川原の露天風呂「砂湯」が人気。

上／2011年完成の真庭市役所では、庁舎前のバス待合所にCLTを使用。下／市庁舎の冷暖房を担う、ガラス張りのボイラー室。ガラスには、森の木が木質バイオマスとして燃料となるしくみが、わかりやすく描かれている。

京都府副知事を経て、2013年に故郷である真庭市の市長に就任した太田昇氏。「木材業界をはじめ地域を超えた民間企業と、行政との結束力が真庭にはある」と話す。

ラス張りになっており見学ができる。電気をつくるのは、二〇一五年から稼動している木質チップの火力発電所「真庭バイオマス発電所」（真庭バイオマス発電株式会社）だ。真庭木材事業協同組合をはじめとする林業関係者に加えて、真庭市も株主となっている。

「最大出力は、一般家庭なら二万二〇〇〇世帯分に相当する一万キロワット。そのうち約一〇〇〇キロワットを所内の動力として使用し、残りの九〇〇〇キロワットをPPS（特定規模電気事業者）に売却。一カ月で二億円ほどの売り上げがあります」

発電所を訪れた際にそう説明してくれたのは、大学の工学部を卒業後、大阪のポンプメーカーに勤めていた松原瑞浦（みずほ）氏だ。真庭市のバイオマス発電事業は、人気の高い視察ツアーといった交流人口を増やす副次的な効果も生みだしたが、松原氏もまたツアーがきっかけで転職、移住となった。

景色はいわゆる工場なのだが、一帯は心地良い木の香りにあふれ、しばし不思議な思いにかられたものの、それもそのはず。燃料ヤードには、山の整備で生じる間伐材や林地残材、製材所のかんなくず、水分が多いため利用価値がないとされる樹皮が山積みになっていた。

見学中も、燃料を運ぶトラックが次々と到着し、製材所や林業関係の業者が燃料を運び込む。以前は廃棄物だったものが、新たな収入とエネルギーを生み出しているというわけだ。

大切に使い切れる資源 木の時代がやってくる

真庭市のバイオマス事業の扉をまさに開いたのは、「真庭バイオマス発電所」の筆頭株主でもある大正十二年（一九二三）創業の銘建工業代表の中島浩一郎氏だ。

中島氏が最初に一七五キロワットの木質バイオマス発電所をつくったのは、一九八四年のこと。カリフォルニアの小さな製材所で、同規模の発電施設を見学して触発されたのがきっかけだ。

「電気は買うものだと思っていましたから、自分でもつくれると知ったのは大きな転換でしたね」

材料は、製材所の作業で生じる木くずだ。

「夜間の電気使用料がほとんど要らなくなり、乾燥用の蒸気も十分確保できるなど、非常に費用対効果がよく、大変気分のいいスタートでした」

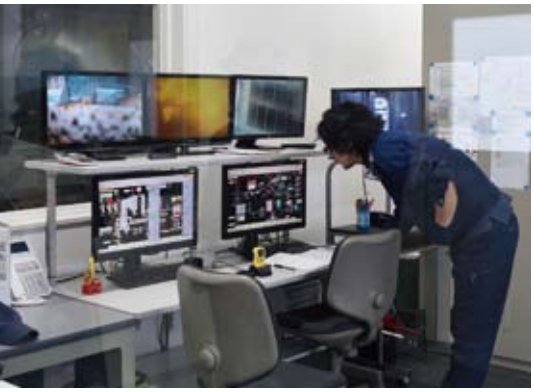
その成果を得て一九九八年には二〇〇〇キロワット、そして一万キロワットの発電所へとつながる

バイオマス発電所の炎さながらに、熱いエネルギーにあふれる銘建工業代表の中島浩一郎氏。バイオマス発電所は燃料となる木くずの確保を含めて各所で人の手を要するため、新たな雇用が生じるメリットもあるという。

右／真庭バイオマス発電所の松原瑞浦氏は、市主催のバイオマスツアー参加で初めて真庭を訪れた。中国勝山駅に降り立った際、木の香りに包まれたのが忘れがたい記憶だとか。
下／銘建工業の作業工程で生じる木くずと、それを圧縮して作ったペレット。日に130トンほど生じる木くずが、ペレットの製造や、2000キロワットの自家発電に再活用されている。
（写真提供：銘建工業）

銘建工業の CLT 製造を担う大断面事業部の若手のひとり、宿輪桃花氏。山口大学を卒業後、銘建工業の先進性に関心をもち就職。真庭での暮らしがはじまった。

左／繊維が直角に交わるように木材を重ねたパネル状のCLT。ヨーロッパでは既に、高層建築にも利用されている。下／真庭バイオマス発電所内の中央操作室。24時間体制で、ボイラーやタービン発電機などの管理を行う。



が、中島氏が、幾度となく口にしたのは、「あるものを使い切る」という表現だった。

「本来、日本人はものを全部使い切るのが上手な民族のはずなんです。ところが一九六〇年代後半、オリンピック前後から木材需要が急激に増えて供給が足りなくなったことで、道を見失いました」

国産の木材価格は上がり、需要に応えるためコストが安い輸入材が重宝される。伐採と成長のバランスを考えつつ森林を育ててきたヨーロッパとは対照的に、日本は目の前に資源があるのに使われないままになり、山は荒れていく。その状況を変えていったのが、中島氏だ。

バイオマス発電と同様に、中島氏が長年取り組んできたのがCLT（Cross Laminated Timber／直交集成板、繊維が直交するように木材を重ねて密着させたパネル）だ。コンクリートよりも軽く、断熱、耐火、耐震性にすぐれているため、ヨーロッパでは一九九〇年代から注目されている。中島氏の活動を後押しするべく、真庭市では全国初のCLT市営住宅を二〇一五年に完成させるなど、先駆的に導入を進めてきた。

日本でもようやく国が動き、オリンピックの舞台となる新国立競技場の一部にも使われる予定だ。二〇一六年度初頭には国交省の建築基準法に基づく強度等の告示があり、高層階の建築にも対応できるようになった。そのための新工場を二〇一六年四月に立ち上げるなど中島氏の先駆的な試みに惹かれ、県外から就職した若い技術者も多くいる。

中島氏の言葉からは、あふれんばかりのバイタリティーが伝わってきた。

「バイオマス発電、CLTを含めて木材の多様な使い方は、これからますます広がる。人の生活にとって、木はコンクリートよりもやさしい。二一世紀後半は、今よりも木材を使っていることは間違いありません。ほかにはない、再生可能な資源なんですから」

エネルギー問題や資源の利用。日本の未来に関わる試みが、真庭市で実践されているといっても過言ではないだろう。

太田市長もまた、こう語っていたのが印象に残っている。

「地域の資源をうまく使うことが安定的な社会をつくり、ひいては地域の魅力につながると思います。一九世紀は鉄、二〇世紀はコンクリート、そして二一世紀は木の時代なんです」

貫いた信念がほかとの差別化を生む

真庭市の里山がもたらす恵みは、木材だけではない。北部の蒜山では、ジャージー牛が実りをもたらしている。

蒜山酪農農業協同組合顧問の石倉健一氏によれば、蒜山高原でのジャージー牛の歴史は一九五四年にさかのぼるという。

「当時の国の方針で、北海道から九州まで、全国数カ所にジャージー牛が導入されたんです。価格が安い、防疫関係で扱いやすい、牛自

蒜山酪農農業協同組合顧問の石倉健一氏。代々受け継がれている組合内の青年部が、酪農家や社会人としての意識を若手が学べる場になっているという。

組合が経営する「ひるぜんジャージーランド」では、牛乳・ヨーグルト・ソフトクリームなどの加工品を販売。レストランでは、ジャージー牛の肉料理も食べられる。

体が小柄で順応性が高いなどのメリットがありました」

しかし、経済性にすぐれた大型のホルスタインがやがて全国的に主流となるにもかかわらず、蒜山にジャージー牛が残ったのはなぜなのか。

「蒜山地区の人間性だと、僕は思います。真面目なんです。県の指導でジャージー牛を入れたのだから、なんとか続けようと。原野の開墾から始めて牧草を育て、牛とつきあってきたのも影響しているかもしれません」

やがてヨーグルトがヒットし、ジャージー牛の存在は広く知られるようになった。原料の牛乳は瓶の上部にクリーム成分が浮くほど濃厚で、ふっくらとしたおいしさがある。一度味わえば、忘れがたい印象を残す。

ほかの地域との差別化とその品質を保つため、組合が設けた基準は厳しい。

「おいしい牛乳を搾るために、まず蒜山産の牧草をたくさん食べさせてください。そのためには、牧草地の土壌診断や牧草の成分検査をしましょうと」

牛乳の成分も検査し、牛舎や飼育環境もくまなくチェックされる。

「点数化して公表するんですよ。厳しい分、基準をクリアした牧場には組合から余分に利益を分けています」

生真面目な姿勢は、後継者にも受け継がれているそうだ。

「若い人でも、はやりのものにぶれない。代々やってきたのだから、僕らはこれで行くと」

いったん歩みだしたら振り返らず、がんこなまでに努力を重ねる蒜山の気質は、今後も引き続きおいしさを生むのだろう。

自分たちが楽しんでこそ町は元気を取り戻す

真庭の資源のなかには、歴史的な景観も含まれる。その代表格が、二万三千石の城下町だった勝山だ。メインストリートの出雲街道を中心に、今も武家屋敷や趣のある建物が残る古い町並みが続く。

ひと昔前は人通りも少なくがらんとしていた景色を変えたのが、「ひのき草木染織工房」代表を務める染織家の加納容子氏だった。江戸期に建てられ明治から続いている実家の酒屋の軒先を、加納氏がオリジナルの「のれん」で飾ったのが発端だ。

その眺めに惹かれて賛同者が徐々に増え、現在は約九〇軒の「の

江戸時代から受け継がれてきた武家屋敷や白壁の建物が多く残る勝山の町は、やわらかな景色のなか、のれんの鮮やかな色が映える。

左／「ひのき草木染織工房」代表の加納容子氏は、東京の女子美術大学でデザインを学んだ後、家業の酒屋を継ぐために故郷に戻った。右／1764年(明和元年)築の実家は現在、趣をたたえたギャラリーになっている。

辻本店代表取締役の辻総一郎氏(右)は、伝統的なまつり「喧嘩だんじり」もこの地域の一体感の礎だと話す。姉の麻衣子氏（左）は、岡山県初の女性杜氏。代表銘柄「御前酒」は、勝山藩主が愛飲した御膳酒だったことに由来する。

れん」がそれぞれに趣向をこらして通りを彩る。その景色を目当てに訪れる観光客は年々増加。二〇年が過ぎ、勝山の人の意識にも変化が生じたと加納氏は話す。

「実のところ、私たちはここを観光地にしようと思っていたわけではなかった。まちが元気になれば、と思っただけなんです。お宅ものれんをかけてほしい、というお願いは一度もしたことがありません。そうしているうちにデザインというものを、まちの人もだんだんわかってきた。感覚がとても発達したと思います。そしてそれぞれに、のれんや町並みに思い入れも深まっています」

まちの活性化を考えるため、加納氏をはじめ有志が集まってはいたが、その目的はなによりも自分たちが楽しむこと。今も当初の目的は変わらないまま、定期的に集会が行われる。

その集いの場を彩るのは、地元の蔵元、一八〇四年（文化元年）創業の辻本店が醸す「御前酒」。多彩に旨みが煌めいて魅せ、名残のキレの良さにふたたび手がのびる。宴がつい長くなるおいしさだ。

現在は代表取締役の辻総一郎氏と杜氏（とうじ）を務める姉の麻衣子氏が、長い歴史を背負う。ふたりの父親、先代の辻均一郎氏は、まちづくりに尽力した加納氏の同志だった。

「最近は、移住者も増えてきた。勝山は外から来た人を受け入れる土壌があるようです」

勝山の現状を伺うなか、麻衣子氏の話は、正直なところ意外だった。城下町には、保守的なイメージがあったからだ。

「まちづくりが、住む人の意識を変えた。外の人に入ってもらい、まちに刺激を与えた方が豊かになるという、うちの父や加納さんたちの考えが少しずつ根付いてきたのだと思います」

人がまちをつくり、まちがまた人を育む。加納氏が話していた、デザイン感覚もまた然りだ。

「勝山のまちづくりはやがて、世代交代が必要になる。今はそのはざまです。我々若手は行政が協力してくれることに慣れてしまっていますが、自分たちで汗を流さなければとも思います」

そう話す総一郎氏の言葉にも、実は均一郎氏の面影が隠れている。

合併により真庭市が誕生するはるか前の一九九三年、中国自動車道の完成とその後のストロー現象を懸念して、「二十一世紀の真庭塾」という組織が立ち上がった。均一郎氏や銘建工業の中島氏ら、当時の若手経営者が自治体の境界を越えて手弁当で集まり、東京をはじめ各地から講師を招いて勉強会を開催。それが現在のまちづくりやバイオマス事業が生まれる礎となったのだ。

「夜な夜なみんなで集まって、何かおもしろいことをやろう、というのが勝山のまちづくりのスタート。自分たちが楽しむスタイルです。無理はせず、そのコミュニケーションを守っていくのが、一番必要なことだと考えています」

そんな総一郎氏の言葉をはじめ、真庭の今と過去がつながる不思議な感動を覚えたのは、映像作家の山崎樹一郎氏とのひとときだった。

左／一八〇四年（文化元年）の創業当時の姿を残す辻本店の蔵は、有形登録文化財指定。下／昔の貯蔵庫を「酒蔵レストラン西蔵」として再活用。イベントやライブも行われる。

人の心もまた江戸時代から変わらず

山崎氏は学生時代から京都で過ごしていたが、一〇年前に父親の実家がある真庭市に移住し、酪農や農業など地元と関わる作品を発表している。

脚本、監督を務めた最新作の「新しき民」は、一七二六年（享保十一年）、津山藩内の山中（現在の真庭市北部）に暮らす農民たちが起こした「山中一揆」がテーマだ。

「山中一揆では、約六〇〇〇人が五日間で一ところに集結した。その地域柄は、今も生きていると思います。なにもせずに時を過ごすのではなく、よくも悪くも動いてしまう。何かやってみよう、変えていこう。そんな気概を持った人が多いような気がするんです」

これまでお話を伺った方々の顔が、胸をよぎる。官と民とが手を組んで動いているのが江戸時代とは異なるが、森林同様に人の心もまた継がれているのを実感した。

山崎氏が映像制作とともにトマトの栽培に勤しむ、兼業農家であることにも興味津々となる。

「今後のことを考える中で、表現活動の前に農業をやってみたいなと思ったんです。映像制作も農業も、計算どおりにはならない。自分の思いで動けませんが、だからこそおもしろい」

「真庭市はそれぞれに個性の強い地域が隣接している」と話す映像作家の山崎樹一郎氏。右上／290年前の一揆の様子を描いた「新しき民」は、黒澤明監督の「七人の侍」を思い起こさせつつ、これまでの時代劇とは異なる方向へ進むと、ニューヨークタイムズ紙で評価された。

農業を営んでいるからこそ、生まれるなにかがあるのだろう。

銘建工業の中島氏もまた、農業とつながる未来を描いていたのを思い出す。

「今後、より大規模なバイオマス発電所をつくりたい気持ちがありますが、そのときには農業利用と一緒にやろうと思っています。木を燃やした際に出る二酸化炭素は、光合成に使える。廃熱利用もできる。あるものを使い切るんです」

この土地ならではのもっとも大切な資源は、「なにかしよう」という人の心なのかもしれない。

山崎氏の畑を真っ赤なトマトが彩る、夏本番のこれからの季節、勝山ではのれんが涼しげに風に揺れ、蒜山では緑の牧草を食むジャージー牛から牛乳が搾られる。バイオマス発電所の周辺は、より強く木々が香ることだろう。

その名のとおり、あまたの花が咲きほこる美しい庭のような景色が、真庭市には広がっている。

高さ110 m、幅20 m。市の中央部に位置する「神庭の滝」は、「日本の滝百選」のひとつ。

蒜山高原のジャージー牛飼育頭数は約2000頭。この土地で生まれ、高原の草をたっぷり食んで育つ正真正銘の蒜山産。標高500 mの一帯は夏場、目にも涼やかな草原が広がり、西日本屈指のリゾート地としても知られる。

対談 守破創

人口約69万人。2015年合計特殊出生率は全国3位を誇りながら、1955年の93万人をピークに人口が減少し続けている島根県。2007年から知事を務める溝口善兵衛氏は、地方創生の先駆者として人口減少問題にどのように取り組んでいるか。産業振興、結婚対策、子育て環境の整備……そこから今の日本が抱える問題を浮き彫りにする。

子育てしやすい先進県へ——島根の戦略に学ぶ日本再生

日本銀行政策委員会審議委員

布野幸利

Yukitoshi Funo

1947年島根県生まれ。神戸大学経営学部卒業。米国コロンビア大学経営大学院（MBA）修了。2000年トヨタ自動車（株）取締役、03年米国トヨタ自動車販売（株）社長、05年同社会長、06年トヨタモーターノースアメリカ（株）取締役会長を経て、09年トヨタ自動車（株）代表取締役副社長に。13年、（株）国際経済研究所代表取締役就任。15年より日本銀行政策委員会審議委員。

島根県知事

溝口善兵衛

Zenbee Mizoguchi

1946年島根県生まれ。東京大学経済学部卒業。68年大蔵省に入省し、在ドイツ連邦共和国日本大使館勤務、ワシントンの世界銀行勤務、在アメリカ合衆国日本大使館公使を経験。その後、大蔵省主計局次長、同大臣官房総務審議官、同大臣官房長、同国際局長、財務省財務官を歴任し、2004年財団法人国際金融情報センター理事長に就任。07年島根県知事に当選。11年再選。15年3選を果たす。

地方の人口減少問題は高度経済成長の副作用

布野　知事は、二〇〇七年から九年にわたり島根県の県政を指揮されています。現在、「地方の問題」として捉えられている人口減少、高齢化、潜在成長力の低下などは、世界における日本自身の位置付けと変わりません。つまり、地方創生とは日本再生と同じことであると私は考えています。そこでまず、島根の現状や課題についてお考えをお聞かせください。

溝口　おっしゃる通り、人口減少は島根においても大きな課題となっています。この問題は、戦後の経済発展と深く関連があります。昭和三十年頃から始まった高度経済成長期に、島根など地方から多くの若者たちが大都市に働きに出かけ、東京、大阪など大都市が発展し、日本は世界第二位の経済大国となりました。

しかし、そこには大きな副作用がありました。大都市は通勤時間が長く、仕事が多いため残業も多い。地方出身の若者には、周りに子育てを助けてくれる親族もいません。つまり大都市は

写真 谷山　實

出雲大社 御本殿

子育てが難しいところだったのです。多くの家庭で一人か二人の子どもを育てることが精一杯で、出生率が低下し、子どもの数そのものが減っていきました。

一方、島根などの地方は通勤時間も短く、残業も少ない。周りには、子育てを助けてくれる父母親族がいるだけでなく、隣近所の人たちが助け合うこともあり、子育てはしやすく出生率は高い。しかし、若者の数が少なくなったので、全体として子どもの数も減ってきました。

地方の若者が出生率の低い大都市に吸引される状況を放置すれば、日本は人口減少のスパイラルから抜け出せません。

長らく地方の問題と考えられてきた人口減少問題について、政府が日本全体の問題と捉え、地方創生の取り組みを始めたことは、大きなチャンスです。若者たちが安心して働き、結婚して子どもを育てられるように雇用を増やすこと、産業を振興することが重要な課題であり、我々も地方創生の財源も活用しながら対策をとっているというのが現状です。

布野　実は私も知事と同じく島根県出身なんです。

溝口　そうなんですね。私も島根で育った後、東京で大学を卒業し、大蔵省（現在の財務省）に入りました。地方財政を担当したこともあり、長年にわたり中央から地方を見てきて地方のことは、大体知っているつもりでした。

しかし、知事として島根に戻ってみて、自分の生まれ育った近隣以外も含めて県全体をみるようになると、改めて島根は住みやすく、数字の上の所得は確かに都市部より少ないが、生活の質の面ではとても豊かな地だということに気付かされました。

これは都会にいて数字を眺めているだけ、あるいは時々旅行するだけではなかなか気付かないものだとも思いました。

布野　都会暮らしが好きな人、田舎暮らしが好きな人、それぞれでしょうが、子育てを含めた人とのつながりで考えると、田舎の方が生活の質が高いことは確かだと私も思います。産業をうまくつくり出すことができれば、言うことはない。そこで産業をどういう形でつくっていくかが、地方の命題であり、同時に国の命題でもあると強く思っています。

国宝や日本遺産など豊かな自然と文化を活かす

布野　人口減少に歯止めをかけるために策定した「島根県総合戦略」はどういったものですか。

溝口　二〇一五年に策定した戦略には、二つの大きな目標があります。

一つは、将来、一定のレベルで人口を安定させることができるように、二〇四〇年までに合計特殊出生率を二・〇七まで引き上げること。

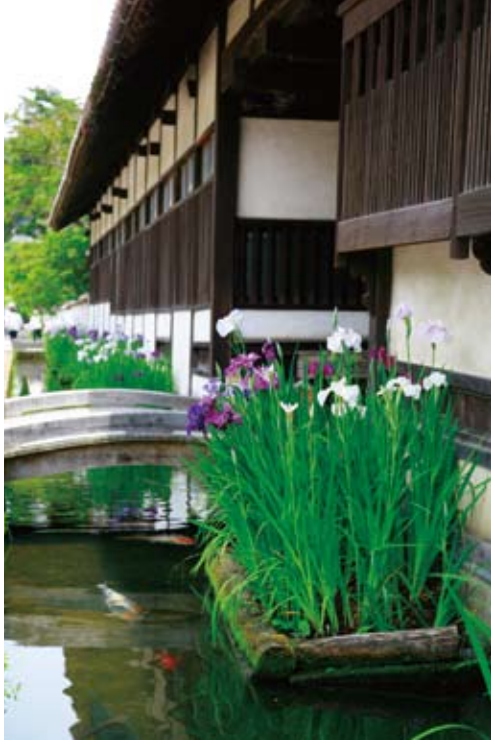
もう一つは、若者の転出による社会減が少なくなるように、雇用を増やして、二〇四〇年までに社会移動を均衡させることです。

この二つの目標を長期的展望として見据えながら、今後五年間に取り組む人口減少対策として、四つの大きな施策を推進しています。

一つ目は、若者たちが安心して住み、子育てができるような職場を増やすため、産業の振興と雇用の創出を進めること。

二つ目は、そうした中で増え

黒島（隠岐の島）



津和野 殿町通り

る若者たちの結婚、出産、子育てを支援していくこと。

三つ目は、島根に定住、あるいはUIターンを促進し、地域を担う人づくりを進めること。

四つ目は、県内でも早くから人口減少が進んだ中山間地域・離島においても、住民の方々が自分の地域で住み暮らせるように「小さな拠点づくり」を行うことです。

布野 一点目の「産業の振興と雇用の創出」については、どのようなビジョンをお持ちでしょうか。

溝口 まずは、島根の産業の大きな部門である観光をよりいっそう促進していくことです。島根には豊かな自然や、文化、歴史が各地に残っています。世界遺産の「石見銀山」、二〇一五年に国宝に指定された松江城、「山陰の小京都」と呼ばれる津和野や、砂鉄を利用した日本古来の「たたら製鉄」も日本遺産に認定されました。古代からある出雲大社は、「縁結びの神様」として全国からたくさんの参拝者があります。「隠岐の島」の豊かな自然は、ユネスコの世界ジオパークに認定されています。それらを活用していくことで観光産業の振興を図っていきます。

布野 近年インバウンド市場拡大が注目されていますが、島根も外国人観光客は増えていますか。

溝口 まだこれからというところです。交通や宿泊施設などインフラの整備が課題です。

布野 インバウンド需要は、短期間で終わってしまうという説もありますが、私は中国、東南アジアの経済力は持続的なものだと考えています。急がなくても、じっくり一歩一歩、受け入れの体制等を整えていけば、今後も持続的に取り込めると思います。

溝口 外国人観光客の旅行地が大都市から地方に広がってきているので、我々も今後に期待しています。

もう一つ、島根の豊かな自然を生かした産業に、農林水産業があります。これは、UIターンの促進にもつながっています。都市部から農業を始めたいと島根に移住し成功した人もいますし、有機野菜を栽培したい、若者たちで大規模農業を経営したい、という人も出てきています。漁業も日本海に豊かな資源があり、隠岐の島で漁業を営みたいという若者が移り住んだケースもあります。

布野 今、注目されている「ノドグロ（アカムツ）」も島根の浜田港産がブランドとして人気ですね。

溝口 ノドグロは男子テニスの錦織圭選手の好物として認知度が高まり、日本全国からの注文が急増して、価格も上がってきました。

布野 おいしい食材は「ある程度値段が高くてもぜひ食べたい」「ここの産地がいい」という人がいるオンリーワンの商品です。地方と都市との距離を超えて、様々なオンリーワンの製品、産物を届けることができれば、地方の産業もますます発展すると思います。

溝口 島根にはノドグロ以外にもいいものがたくさんあるので、全国に広げていきたいですね。農林水産業の後継者不足の問題も、UIターンの若者を後継者とするとか、集落単位で共同で農業を営む方式により解決していこうとしています。

布野 事業や農林水産業など産業が振興したあとは、それをどのように継承していくか、そのサポートも重要な視点ですね。

IT産業など先進産業がUIターン増加につながる

溝口 UIターンの促進にはIT産業も大きく貢献しています。

実は、日本で初めて世界で通用するコンピューター言語「Ruby（ルビー）」を作った〝まつもとゆきひろ〟（注）さんが住んでいることもあり、島根県ではソフトウエア産業が一定の広がりをもって集積しつつあるのです。インターネットのおかげで、

松江城

どこでもソフトウエアの開発が可能です。世界的に見ても、アメリカのサンノゼやインドのバンガロールなど、自然が豊かな地域でソフトウエア産業が発展することは珍しくありません。

島根県でも中山間地域で古民家をＩＴ開発の仕事場にしたい人が増えています。都市のほうがクライアントとの会議では便利ですが、インターネットにより距離という障害もほぼなくなりました。それよりもむしろ、自然の中の静かでゆったりした環境で開発をすることを求めるエンジニアが多いのです。

仕事がしやすいだけでなく、子育ての上でも都市部にある様々なストレスが少なく、のびのび育てられることも選ばれる理由の一つです。

布野　知事と私は同年代ですけれども、我々が小さいころの大らかな生活が島根にはまだ残っているのですね。そうした生活とＩＴ技術の活用で地方の潜在成長力が上がる可能性は大きい。

溝口　おっしゃる通りです。ただ、クライアントがいる遠距離の大都市に、エンジニアが行かなくてはならないことも多々あります。そこで、県としてその交通費を補助するといった支援も行っています。

全国的にも先駆的な子育て支援を実施

布野　総合戦略の二つ目、若者たちの結婚、出産、子育てを支援していくことについては、具体的にはどのような施策を行っていますか。

溝口　この分野は直接住民と向き合う市町村が担っています。そこで、若い子育て世帯等の経済的負担を軽減するため、市町村が行っていた一定所得以下の世帯の三歳未満の第三子に対する保育料軽減を、第一子、第二子に広げられるように、市町村への財政支援制度を創設しました。

また、「はっぴいこーでぃねーたー」と呼ばれる結婚相談員や、子育て相談員の配置、産前・産後のサポート充実など、安心して結婚・子育てができる体制整備のため、市町村に対する補助制度を創設しました。

このほか、共働き家庭が増加していることから、年間を通じて待機児童ゼロをめざし、病児保育や放課後児童クラブを拡大する取り組みを支援しています。

布野　若者たちが家族とともに豊かに暮らせる生活環境を維持しながら、新しい産業がどんどん興ってくるといいですね。

溝口　一方で、高齢の方の暮らしやすさにも配慮しています。それが先ほど挙げた総合戦略の四つ目の「小さな拠点づくり」です。中山間地域や離島は、過疎化、高齢化による人口減少が他の地域よりも早く進んでいます。そこで、各市町村に設けられた県内二二七の公民館を軸に、買い物、金融、医療、介護等の日常生活に必要な機能・サービスの維持・強化を図っています。また「小さな拠点」に集約された機能・サービスを手軽に利用できるよう、交通ネットワークの再構築を支援し、交通弱者の移動手段を確保していきます。

島根には、地方創生のいろいろな種がたくさんありますから、それを花咲かせていくことが課題ですね。

布野　本日は、知事のお話をお聞きし、島根の視点から日本の問題とその処方箋が見えてきたように思います。お忙しい中、お時間をいただきましてありがとうございました。

（注）本名は「松本行弘」だが、ひらがな表記されることが定着している。

貨幣の世界――❷

前回は古代オリエントから近代の欧州を中心に貨幣の形をご紹介しました。今回は前後編に分けて、中国を中心とする東アジアの貨幣の形を、歴史を追いながらみていきたいと思います。

形 その2 古代から近世の東アジア 前編

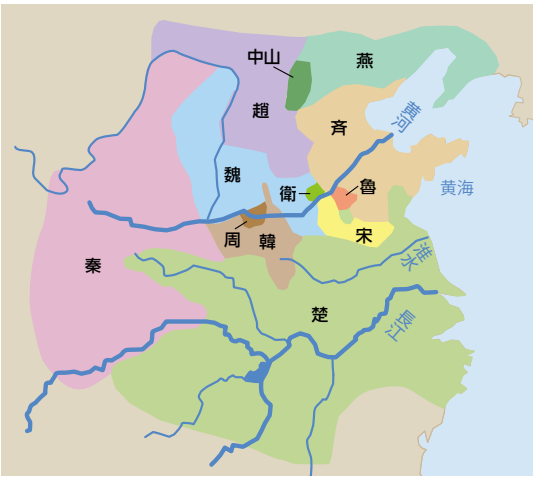
バラエティーに富む古代中国の貨幣

「貨」「財」「購」「買」「賃」と経済活動にかかわる漢字には「貝」が使われているものが多く見られます。古代中国の商（殷、紀元前一六世紀頃～紀元前一一世紀頃）や周（紀元前一〇五〇頃～紀元前二五六年）では、子安貝（タカラガイ科の巻貝の俗称）が貨幣の役割を果たしていたのではないかとされています（写真1）。

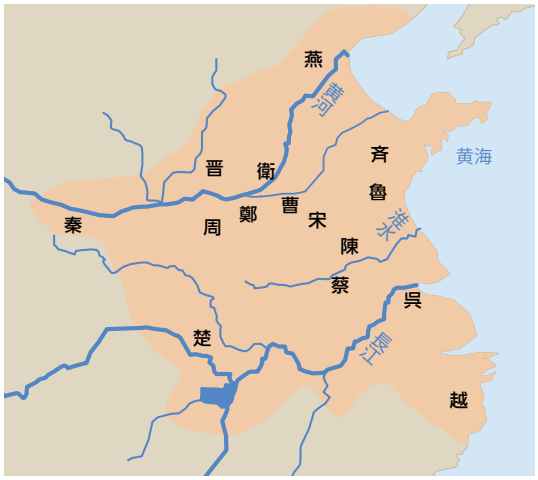
その後、周の王室の権威が落ちていく中、さまざまな国が「中原に鹿を逐う」春秋戦国期（紀元前八世紀～紀元前三世紀）となります。諸子百家の時代とも言われますが、さまざまな国において、子安貝や生活必需品に範をとったとみられるいろいろな形の金属貨幣が造られ、多くの地域でそれらが子安貝にとってかわって使用されるようになりました。これらの金属貨幣も、もとは贈答に使われていたものが、交換の媒介物として使われ、貨幣に転化したのではないかとされています（写真2～6）。

中国の貨幣の登場時期は、古代オリエントの貨幣の登場時期と同じ頃です。その製造方法は、古代オリエントでは金属への「打刻」が採用されたのに対して、古代中国の青銅貨幣は、鋳型に青銅を流してつくる「鋳造」でした（銅銭の鋳造

戦国時代の主要国（紀元前５世紀～紀元前３世紀頃）



春秋時代の主要国（紀元前８世紀～紀元前５世紀頃）



方法の詳細については、本誌二〇一五年春号の「お金の源　第一回銅貨」をご覧ください）。

同時代の古代ギリシャ・オリエントの貨幣が現在の目からすると少々いびつで不揃いであるのに対して、古代中国の青銅貨幣は、商（殷）や周の青銅器製造技術の高さをほうふつとさせるように、形態がとても整っています。

（後編は次号でご紹介します）

写真１　子安貝貨幣

タカラガイは日本でも千葉県の館山市等暖かい地方の海で見ることができます。

春秋戦国時代の貨幣

写真３　刀貨（刀幣）

写真２　蟻鼻銭（ぎびせん）

見た目のとおり、蟻の頭部のような形です。

写真４　布貨（布幣）

写真５　円銭
（秦・重一両十二一珠）

写真６　楚の金貨　郢爯（えいしょう）

楚（そ）は、現在の江南（こうなん）地域。もともとは小さな極印を多数連ねた板状の金貨で、写真のように極印ごとに切断するなどして秤量貨幣として使用されていたようです。ちなみに、楚を滅ぼした秦（しん）の公定レートで、金１斤（約320ｇ）＝銅銭１万枚とされていたことからみて、この金貨は日常使いには高額過ぎたと思われます。

（写真１～６提供：日本銀行金融研究所貨幣博物館）

貨幣の始まり

中国の北方内陸部にあった商（殷）では、はるか数千キロも南の海で産出される子安貝が貴重品として扱われ、王と関係する王族や豪族等の間で贈答品として使われていたとされています。そうした贈答のサイクルの中から、交換の媒介物＝貨幣的役割が生じ、子安貝は貨幣に転じていったのではないかと言われています（なお、子安貝はあくまで贈答品の枠を超えないという学説もあります）。

さて、西にヘロドトスあれば東に司馬遷あり。彼の『史記平準書』では貨幣の始まりをこう書いています。

「農工商交易之路通。而龜貝・金錢・刀布之幣興焉。所從來久遠。（解釈：農・工・商それぞれが相互に取引する道が通じて、亀貝（きばい）〈亀の甲や貝殻〉、金銭〈黄金や穴あきの青銅貨〉、刀貨・布貨〈刀形や鍬形の青銅貨〉などの貨幣の使用が始まった。その起源はたいそう古い）」（注）

産業の発展が貨幣をもたらしたというのは、アリストテレスと同じですね。

（注）史記の原文・解釈は、『史記平準書・漢書食貨志』（加藤繁注釈、岩波書店）P.64、65および『史記 下 漢武篇』（田中謙二、一海知義著、朝日新聞社）P.88～90を参照しています。

日本銀行のレポートから

日本銀行は、1月、4月、7月および10月の政策委員会・金融政策決定会合において、先行きの経済・物価見通しや上振れ・下振れ要因を詳しく点検し、そのもとでの金融政策運営の考え方を整理した「経済・物価情勢の展望」（展望レポート）を決定し、公表しています。本稿では、2016年4月の展望レポート（基本的見解は4月28日公表、背景説明を含む全文は4月29日公表）のポイントを解説します。
＊全文は日本銀行ホームページに掲載されています。http://www.boj.or.jp/mopo/outlook/index.htm/

「経済・物価情勢の展望」（展望レポート）

――二〇一六年四月――

二〇一六～二〇一八年度の中心的な見通し（図表1・2）

【景気】

当面、輸出・生産面に鈍さが残るとみられるが、家計・企業の両部門において所得から支出への前向きの循環メカニズムが持続するもとで、国内需要が増加基調をたどるとともに、輸出も、新興国経済が減速した状態から脱していくことなどを背景に、緩やかに増加するとみられる。このため、わが国経済は、基調として緩やかに拡大していくと考えられる。

【物価】

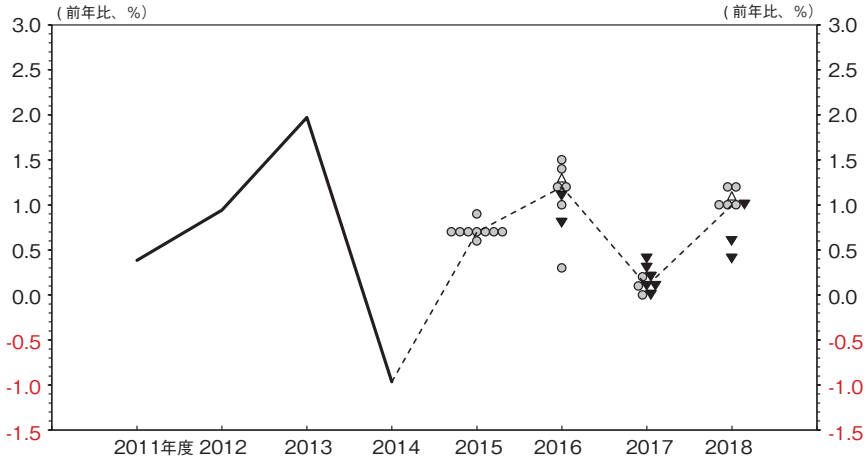
消費者物価の前年比（消費税率引き上げの直接的な影響を除くベース）は、エネルギー価格下落の影響から、当面0％程度で推移するとみられるが、物価の基調は着実に高まり、二％に向けて上昇率を高めていくと考えられる。「物価安定の目標」である二％程度に達する時期は、原油価格が現状程度の水準から緩やかに上昇していくとの前提のもとでは、二〇一七年度中になると予想される。その後は、平均的にみて、二％程度で推移すると見込まれる。

金融政策運営

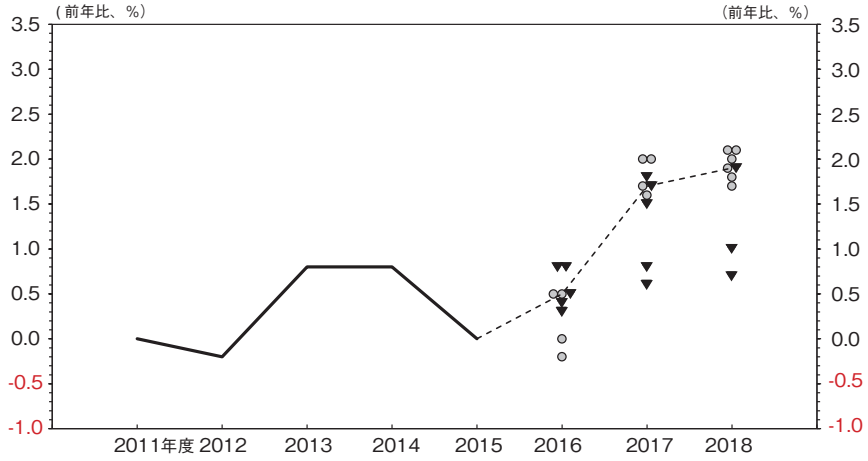
二％の「物価安定の目標」の実現を目指し、これを安定的に持続するために必要な時点まで、「マイナス金利付き量的・質的金融緩和」を継続する。今後とも、経済・物価のリスク要因を点検し、「物価安定の目標」の実現のために必要な場合には、「量」・「質」・「金利」の三つの次元で、追加的な金融緩和措置を講じる。

図表１　政策委員の経済・物価見通しとリスク評価

（1）実質 GDP



（2）消費者物価指数（除く生鮮食品）



（注１）実線は実績値、点線は政策委員見通しの中央値を示す。

（注２）●、△、▼は、各政策委員が最も蓋然性が高いと考える見通しの数値を示すとともに、その形状で各政策委員が考えるリスクバランスを示している。●は「リスクは概ね上下にバランスしている」、△は「上振れリスクが大きい」、▼は「下振れリスクが大きい」と各政策委員が考えていることを示している。

（注３）消費者物価指数（除く生鮮食品）は、消費税率引き上げの直接的な影響を除いたベース。

図表２　政策委員見通しの中央値

（対前年度比、%）

	実質 GDP	消費者物価指数（除く生鮮食品）	消費税率引き上げの影響を除くケース
2015 年度	＋ 0.7	0.0	
（1 月時点の見通し）	（＋ 1.1）	（＋ 0.1）	
2016 年度	＋ 1.2	＋ 0.5	
（1 月時点の見通し）	（＋ 1.5）	（＋ 0.8）	
2017 年度	＋ 0.1	＋ 2.7	＋ 1.7
（1 月時点の見通し）	（＋ 0.3）	（＋ 2.8）	（＋ 1.8）
2018 年度	＋ 1.0	＋ 1.9	

（注 1）原油価格（ドバイ）については、1 バレル 35 ドルを出発点に、見通し期間の終盤である 2018 年度にかけて 40 ドル台後半に緩やかに上昇していくと想定している。その場合の消費者物価（除く生鮮食品）の前年比に対するエネルギー価格の寄与度は、2016 年度で－ 0.8% ポイント程度と試算される。また、寄与度は、2016 年度後半にマイナス幅縮小に転じ、2017 年央に概ねゼロになると試算される。

（注 2）消費税率については、2017 年 4 月に 10%に引き上げられること（軽減税率については酒類と外食を除く飲食料品および新聞に適用されること）を前提としているが、各政策委員は、消費税率引き上げの直接的な影響を除いた消費者物価の見通し計数を作成している。消費税率引き上げの直接的な影響を含む 2017 年度の消費者物価の見通しは、税率引き上げが課税品目にフル転嫁されることを前提に、物価の押し上げ寄与を機械的に計算したうえで（＋ 1.0%ポイント）、これを政策委員の見通し計数に足し上げたものである。

（注 3）2015 年度の消費者物価（除く生鮮食品）は実績値。

日本銀行のレポートから

日本銀行は、わが国金融システムの安定性について包括的な分析・評価を示し、金融システムの安定確保に向けて関係者とのコミュニケーションを深めることを目的に『金融システムレポート』を年２回作成･公表しています。『金融システムレポート』の分析結果については、金融システムの安定確保のための施策立案や、モニタリング・考査を通じた個別金融機関への指導・助言に活用しています。また、国際的な規制・監督の議論にも活かしています。金融政策においても、マクロ的な金融システムの安定性評価は、中長期的な視点も含めた経済･物価動向のリスク評価を行ううえで重要な要素のひとつとなっています。

＊全文は日本銀行ホームページに掲載されています。http://www.boj.or.jp/research/brp/fsr/index.htm/

「金融システムレポート」

―二〇一六年四月―

わが国の金融システムの総合評価

わが国の金融システムは、安定性を維持しています。金融仲介活動は、引き続き円滑に行われています。昨夏以降の国際金融資本市場等における変動拡大は、わが国にも相応に影響を及ぼしていますが、マイナス金利付き量的・質的金融緩和のもとで、金融システムの安定性・機能度への影響は限定的に止まっています。

金融システムの機能度

金融機関の国内貸出は、幅広い業種での資金需要を受けて、前年比二％台前半の伸びを続けています（図表１）。海外貸出についても、外貨調達力を踏まえつつ積極的に取り組んでおり、前年比一割程度の伸びとなっています。有価証券投資では、円債残高が高水準にあるもとで外債や投資信託等による運用を積み増しています。また、機関投資家等も、金利の一段の低下を受けて国内債からリスク資産に投資先をシフ

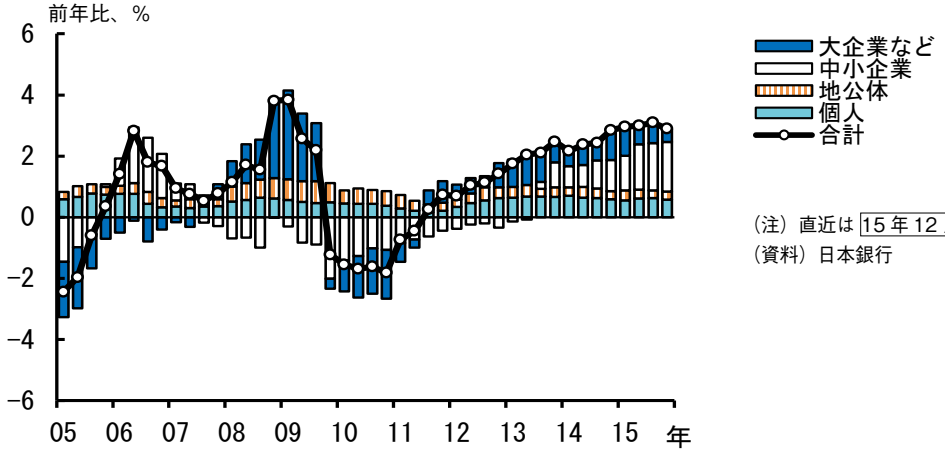
トする動きを続けています。こうしたもとで、企業・家計の資金調達環境は、より緩和的となっています。

金融システムの安定性

金融機関の財務基盤は、全体として充実した状況にあります（図表2）。また、金融機関は十分な円資金流動性を有しています。外貨資金に関しては、一定期間調達が困難化しても資金不足をカバーできる流動性を確保しているほか、調達基盤の拡充に向けた取り組みが着実に進捗しています。ただし、市場性調達の比重はなお高く、外貨資金市場の流動性の状況を注視していく必要があります。

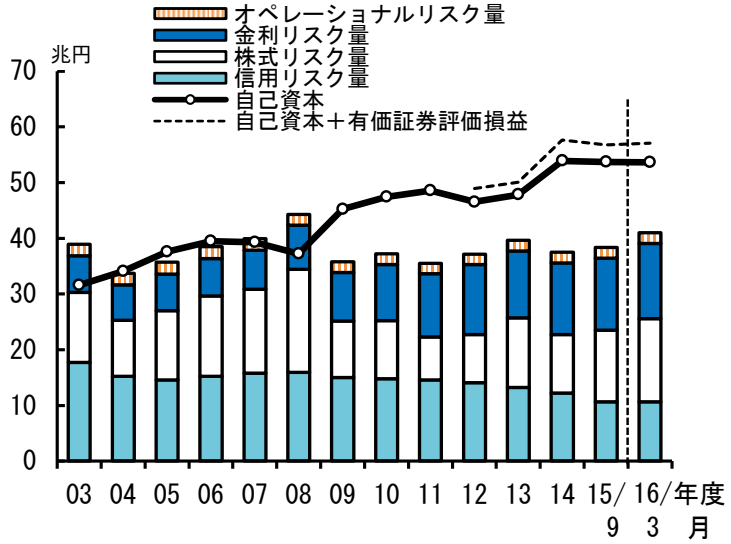
この間、マクロ的な信用量を含め、幅広い金融活動において趨勢からの大きな乖離はみられません（図表3）。不動産市場は、地域差を伴いつつ活発になっているほか、金融機関の不動産関連貸

図表1　金融機関の借入主体別貸出（国内）



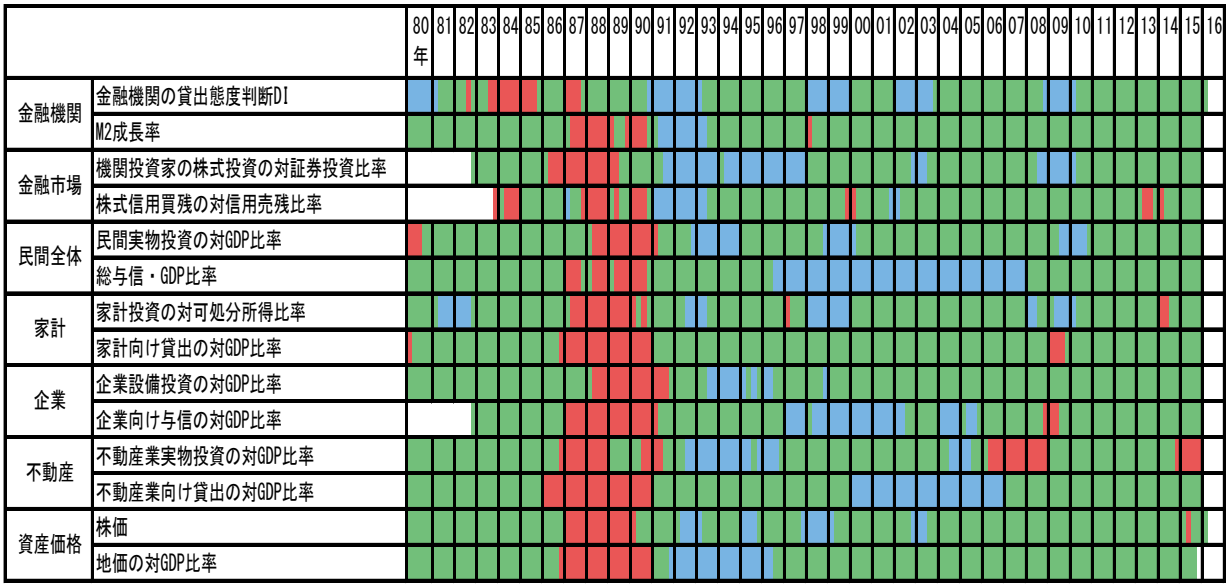
（注）直近は15年12月末。
（資料）日本銀行

図表2　金融機関のリスク量と自己資本



（注）1. 直近は、株式リスク量および株式評価損益は16年3月末、円債・外債の金利リスク量および有価証券評価損益（除く株式）は16年2月末、その他の金利リスク量（円貨）は15年12月末、その他は15年9月末。
2. 株式リスクは株式投信を含まない。信用リスクは外貨建て分を含む。株式リスクと金利リスク（一部オフバランスを含む）は大手行のみ外貨建て分を含む。
3.「自己資本＋有価証券評価損益」は、国内基準行の有価証券評価損益（税効果勘案後）を自己資本に足し合わせたもの。
4. 信用金庫の15年9月末、16年3月末については、自己資本、信用リスク、オペレーショナルリスク量を15年3月末の水準から横ばいと仮定。
（資料）日本銀行

図表３　金融活動指標



※赤色：過熱方向（トレンドを一定幅以上上回る状態）
　青色：停滞方向（トレンドを一定幅以上下回る状態）
　緑色：それ以外
　白色：データがない期間

（注）直近は、金融機関の貸出態度 DI、株価は16年１～３月、地価の対 GDP 比率は15年７～９月、その他は15年10～12月。

（資料）Bloomberg、財務省「法人企業統計」、東京証券取引所「信用取引残高等」、内閣府「国民経済計算」、日本不動産研究所「市街地価格指数」、日本銀行「貸出先別貸出金」「資金循環統計」「全国企業短期経済観測調査」「マネーサプライ」「マネーストック」

出の伸び率が上昇していますが、全国の地価動向などからみると、全体としては過熱の状況にないと考えられます。

マイナス金利付き量的・質的金融緩和と金融システム

マイナス金利付き量的・質的金融緩和の影響をみると、市場金利は一段と低下し、預金・貸出金利も幅広く低下しています。こうしたもとで、金融機関等に対して、貸出に対するより前向きな取り組みを含め、もう一段のポートフォリオ・リバランスを促す力が作用しています。これらは、金融システムの機能度をより円滑化する方向での変化です。

もっとも、効果の浸透を制約している要因も存在しています。たとえば、幅広い主体が運用方針の見直しやシステムを含む実務対応を進めていく途上にあるなかで、取引見合わせの動きが

幅広くみられます。また、本年入り後、国際金融資本市場の不安定な動きが続いたことが、株安・円高や外貨調達コストの上昇等に繋がっているほか、金融機関等のリスクテイクを一部抑制する方向に働いています。したがって、これらの要因が解消されていけば、政策効果がより浸透していくとみられます。

金融機関収益に対しては、当面、一段の下押し圧力が働きますが、金融機関は総じて充実した資本基盤を有するもとで前向きの信用仲介を継続していくとみられます。金融機関のポートフォリオ・リバランスが、経済・物価情勢の改善と結びついていけば、基礎的収益力の回復にもつながっていくと考えられます。もっとも、足もとの収益力の減少傾向が長引く場合には、いずれ信用仲介機能の制約に繋がっていく可能性があります。金融安定面への影響としては、マクロ的なリスク蓄積や資産価格等への影響が行き過ぎる過熱方向のリスク、収益減少に歯止めがかからず金融仲介が停滞方向に向かうリスクの両面をみていく必要があります。

マクロプルーデンスの視点からみたリスクと課題

金融システムが、将来にわたって安定性を維持しつつ、円滑な金融仲介活動を通じて経済成長に貢献していくには、潜在的な脆弱性に繋がり得るマクロ的なリスクの蓄積や構造的な変化に着実に対応していく必要があります。

マクロ的なリスク蓄積の観点からは、①金融システム全体としてみた海外経済および内外金融資本市場の変動に対するエクスポージャーの拡大が、構造的な変化としては、②大規模金融機関のシステミックな重要性の高まりと、③国内預貸業務の収益性の低下が挙げられます。マイナス金利付き量的・質的金融緩和の効果が浸透していく過程では、これら三つの何れに対しても強く影響していくと考えられます。

このほか、やや長い目でみて金融安定に影響し得る要素としては、④家計部門における「貯蓄から投資へ」の持続性、⑤FinTechを含む金融分野でのIT活用の広がりとサイバー・セキュリティの重要性の高まりが挙げられます。

日本銀行の取り組み

日本銀行は、金融機関に対し上述の課題への対応を促していきますが、その際、金融機関の資本基盤は充実していることを踏まえ、前向きなリスクテイクやグローバルな業務展開を可能とする管理力の充実を促すことに力点を置きます。また、モニタリング・考査、セミナー等を通じて、金融機関の対応をサポートするなど、金融安定の確保に向けた各種対応を講じていきます。

平成二十八年熊本地震後の日本銀行の対応

▼このたびの熊本地震により被害を受けられた被災者の皆さまに対しまして、心よりお見舞いを申し上げます。

金融機能の維持と円滑な資金決済の確保

▼今回の地震発生後、日本銀行は、熊本、大分をはじめとした九州地方所在の各支店・事務所を含め、すべての本支店・事務所で通常どおり銀行券の供給や窓口業務を行っています。また、日本銀行と金融機関等とを結び、お金のやりとりを電子的に行うコンピューターネットワークシステム「日銀ネット」も、正常かつ安定的に稼動しています。

▼四月十五日には、「平成二十八年熊本県熊本地方の地震に係る災害に対する金融上の措置について」を発出し、金融機関等に対し、預金通帳や印鑑等を紛失した場合における預金等の払い戻しなどについて、状況に応じ適切な措置を講じるよう要請しました。

金融政策面での対応

▼日本銀行では、熊本地震の被災地の金融機関を対象に、復旧・復興に向けた資金需要への対応を支援するため、「被災地金融機関支援オペ（平成二十八年熊本地震にかかる被災地金融機関を支援するための資金供給オペレーション）」等の措置を導入することを決定しました。これは、日本銀行から被災地の金融機関向けに、無利息で総額三千億円まで貸付けを行うという仕組みです。また、金融機関がこの仕組みで借入れをした残高の二倍の金額まで、当該金融機関が保有する日本銀行の当座預金残高に対して、マイナス金利を適用せず、ゼロ％の金利を適用することとしました（四月二十七日、二十八日の金融政策決定会合にて決定）。

大分支店店内見学を再開

▼大分支店では、大口営繕工事のため一年間にわたり中止していた店内見学を二〇一六年三月から再開しました。

▼再開に当たり目玉になるものを作ろうと支店職員がアイデアを出し合い、「銀行券裁断片で作製した府内城模型」や「３Ｄ技術を用いた福澤諭吉胸像」などのコーナーを新設しました。

３Ｄプリンタで作製した樹脂製諭吉像。着物は職員の手作りです

顔の立体感がリアルな段ボール製の諭吉像

５億円分の銀行券裁断片で作製した「府内城」

▼「福澤諭吉」は大分県中津市の出身で、昭和五十九年（一九八四）から現在まで、一万円札の顔として活躍中です。中津市にある福澤諭吉記念館にも一万円札の一号券の一つが展示されています。

▼これらは地元の新聞やテレビだけでなく全国や海外でも報道されるなど大変評判を呼び、見学の問い合わせが多く寄せられています。

▼大分支店の見学お申込みについては、日銀ＨＰの「日本銀行支店・事務所」→「日本銀行大分支店」→「支店見学のご案内」のコーナーをご覧ください。

決済システムフォーラムを開催

▼日本銀行は三月十七日、十八日に、本店において、「決済システムフォーラム」を開催しました。

▼情報技術革新の下で、決済サービスのイノベーションや「フィンテック」（注）と呼ばれる動きが広範にみられている中、日本銀行は今回のフォーラム開催にあたり、プレゼンターと参加者を公募しました。これには多数の応募があり、非金融企業を含め、決済やフィンテックに関わる広範な企業が集うイベントとなりました。

フォーラムには幅広い企業が参加しました

▼初日には、黒田東彦（はるひこ）総裁が開会挨拶を行いました。黒田総裁は、決済イノベーションに対する日本銀行の視点などについて述べたうえで、日本銀行決済機構局内にフィンテックセンターを設立することを発表しました。その後、デジタル通貨の基盤技術である分散型元帳を金融実務に応用する上での課題など、リテール決済を巡る広範な論点について、活発な議論が行われました。

▼二日目には、桑原茂裕理事が開会挨拶を行い、決済システムの高度化に向けた日本銀行の取り組みなどについて紹介しました。続いて、大口決済システムの高度化を巡る今後の課題などについて、さまざまな意見交換が行われました。

▼当日の議事概要については、日銀HPの「決済・市場」→「決済システムの概要」→「決済システムフォーラム・シンポジウム」のコーナーをご覧ください。

（注）フィンテック（FinTech）とは、金融（Finance）と技術（Technology）との融合を指す言葉です。新しい情報技術の活用などを通じて、個人や企業が、借入れや送金、投資アドバイスなどの金融サービスをより便利かつ迅速に受けられるようにしたり、他のサービスと組み合わせた、より高度な金融サービスの提供を目指すものといえます。例えば、スマートフォンなどを活用した決済サービスの提供や、大量のデータを迅速に分析し、それぞれの人に合わせたサービスの提供につなげていく取り組みなどが行われています。

「日銀春休み親子見学会」の開催（「日銀夏休み親子見学会」のご案内）

▼日本銀行本店では、四月一日（金）、四日（月）の二日間にわたり、小学校四～六年生および中学生のお子さまとその保護者の方を対象に、「春休み親子見学会」を開催しました。

▼今回の見学会には、合計八四組一八一名の皆様にご参加いただき、国の重要文化財に指定されている本店本館（旧地下金庫など）や現在窓口業務を行っている新館営業場をご見学いただきました。また、おこづかい帳の付け方などを通してお金の大切さについて考えていただいた他、お札に施されている偽造防止技術の紹介、一億円の重さ体験やお札の数え方体験などの学習プログラムを通じて、皆様には日銀やお金について楽しみながら学んでいただきました。

発券局の職員が「お札の数え方」をレクチャーする模様

▼毎回好評をいただいております親子見学会の次回の開催は、夏休み期間中の八月一日（月）～五日（金）を予定しています。

▼「日銀って何をしているところ？」というお子さまの好奇心にお応えできるようなプログラ

ムをご用意しております。

▼参加は無料です。お申し込み方法などの詳細は日銀HPにてご案内いたします。皆さまのお越しを心よりお待ちしています。

「第一二回 日銀グランプリ ～キャンパスからの提言～」論文募集中

応募締切：九月三十日（金）

▼「日銀グランプリ」は、日本銀行の金融教育充実に向けた取り組みの一つとして、学生の皆さんを対象に毎年開催しています。今年度も応募論文の受付を開始しました。

▼テーマは「わが国の金融への提言」。わが国の金融に関するものであれば、どのように設定していただいても構いません。多くの学生の皆さんからの斬新な提言をお待ちしています！

▼日銀HPに専用コーナーを設け、概要、過去の決勝参加チームの作品全文および審査員講評等を紹介しています。

【親子見学会・日銀グランプリのお問い合わせ先】
日本銀行情報サービス局
総務企画グループ
〇三―三二七七―二四〇五

【訂正】

四五号（三月二十五日発行）の「貨幣の世界」の一部に誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。

■二一ページ　写真2

（誤）リュディア王国（紀元前7～6世紀）のエクレトロン金貨

（正）リュディア王国（紀元前7～6世紀）のエレクトロン金貨

編集後記

■平成28年熊本地震により犠牲となられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された皆さまに謹んでお見舞いを申し上げます。（編集一同）

■5月30日をもって情報サービス局長を退任し、本号の編集が編集長としての最後の仕事となりました。ご愛読いただき、ありがとうございました。日本銀行の仕事やそこで働く役職員の姿をわかりやすくお伝えしたいと考えて編集に努めてきましたが、いかがだったでしょうか。また、全国の支店を通じて地域の皆様方とも触れ合いを持たせて頂いている点もお伝えしたかったことの一つです。今後とも、日銀と「にちぎん」を宜しくお願い致します。（髙橋）

■このたび編集長に就任しました。日本銀行で様々な仕事をして33年目となりますが、広報誌「にちぎん」の仕事に携わるのは初めてです。これまでの経験を生かして、読者の皆様に、日本銀行の活動を面白く、わかりやすく紹介していきたいと思います。どうぞ宜しくお願い致します。（鶴海）

※本誌は、全国の日本銀行本支店および貨幣博物館、旧小樽支店金融資料館等でお配りしています。個人の方の定期購読、郵送はお取り扱いしておりませんのでご了承ください。なお、既刊号全文をPDFファイル形式で日本銀行ホームページ上に掲載していますのでご利用ください。（http://www.boj.or.jp/announcements/koho_nichigin/index.htm/）

※本誌に掲載している内容は、必ずしも日本銀行の見解を反映しているものではありません。日本銀行の政策・業務運営に関する公式見解等については、日本銀行ホームページ（http://www.boj.or.jp/）をご覧ください。

にちぎん　2016年夏号
編集・発行人　鶴海誠一
発行　日本銀行情報サービス局
〒103-8660
東京都中央区日本橋本石町2-1-1
☎03-3277-2405

デザイン　株式会社市川事務所
印刷　文唱堂印刷株式会社
©日本銀行情報サービス局　禁無断転載

＊本誌の用紙は、環境・社会・経済のすべての側面に配慮した厳しい基準に従って適切に管理された森林からの木材を原料としていることを示す、FSC認証紙を使用しています。

from New York

ニューヨークの金融街を散策

金融街のシンボルとなった「チャージングブル」。この雄牛の猛然たる様は株式市場の力強さとその予測不可能な動きなどを表現しています

マンハッタン島南部のウォールストリートを中心とするニューヨークの金融街には、高層ビルや歴史的建造物が多く立ち並び、ビジネスマンや観光客で絶えずにぎわっています。

街を歩くと、ちょっとした広場や道の空間に軒を連ねる、色とりどりのベンダー（料理などを販売する露店）に目が留まります。ニューヨークのベンダーには長い歴史があり、その昔、近郊の沿岸で豊富に採れたカキの路上販売が元祖だとも言われています。とあるベンダーの店員と話をすると、「エジプトから来た」と言います。地価の高いニューヨークでは、こうした路上販売が、移民の生活を支える礎となり、ひいては、大きなビジネスチャンスとなっています。このため、売られる料理も、移民の流入に合わせて変遷してきたそうです。現在では、イスラム人口の増加を映じて、イスラム教徒でも食べられる料理を意味する「HALAL（ハラール）」、と銘打ったベンダーが目立ちます。昼時になると、店の前に行列ができることも珍しくはありません。

高層ビルを見上げつつ歩いていると、下から湧き出てくる蒸気に巻き込まれることがあるのでご注意。実は、マンハッタン島の地下には、蒸気を運ぶパイプラインが四方八方に張り巡らされています。地下から蒸気が湧き上がるのは、浸入した水がパイプラインによって熱せられ、気化しているためです。金融街には、蒸気船の実用化に成功したロバート・フルトンがその名の由来となったフルトンストリートが東西に延びているなど、「蒸気の街」といった一面もあるのです。蒸気は、高層ビルなどの暖房としてはもちろんのこと、冷房としても転用可能で、夏場に増加する電力需要を抑える働きもしています。

このように、少し散策するだけで色々な発見があるニューヨークの金融街は、本日もさまざまな人々が行き交い、活気に満ちています。

（ニューヨーク連邦準備銀行）

＊本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。

様々な料理を手軽に味わえるベンダー

所々で湧き上がる蒸気

にちぎん　第二巻　第二号　通巻四六号　平成二十八年六月二十七日発行

にちぎん

ISSN 1880-0327